

◀ 目 次 ▶

- ・平成18年 新年互礼会 ……3
- ・年頭所感 学長 今井久夫 ……3
- ・平成17年度 大学卒業式  
  大学院学位認証式 ……5
- ・平成17年度 大学卒業式ならびに大学院  
  学位認証式告辞 学長 今井久夫 ……5
- ・第54回大学卒業式、第42回大学院学位  
  認証式式辞 理事長職務代行 今井久夫 ……7
- ・寄 贈 ……9
- ・学位（博士）授与報告 ……9
- ・<sup>※</sup>稗田豊治名誉学長に正五位伝達 ……10
- ・大阪歯科大学公開講座・枚方講座 ……10

- ・平成17年度 解剖体遺骨返還式 ……10
- ・教職員6名定年退職 ……11
- ・定年退職を迎えて 戸田忠夫 ……11
- ・わが人生に悔いは無し 今井久夫 ……11
- ・定年退職を迎えて 二川修治 ……12
- ・定年退職を迎えて 都築弘明 ……13
- ・強烈な！良き！思い出とともに  
  寺崎温子 ……13

<トピックス>

- ・平成17年度 第2回人権講演会 ……14
- ・人 事 ……14
- ・あとがき ……15



平成17年度 大学卒業式・大学院学位認証式（平成18年3月17日）

平成18年 新年互礼会

平成18年1月5日(木)午前11時より、新年互礼会が楠葉学舎講堂において開催された。

教職員および本学関係者が多数出席するなか、田中法人事務部長の進行により、今井久夫理事長職務代行・学長が新年の挨拶を述べた。

年頭所感

学長 今井 久夫

明けましておめでとうございます。本互礼会にご出席賜りました同窓の先生方、ならびに名誉教授を始めとする本学教職員の方々には、お健やかな新年を迎えられましたこととお察し申し上げます。同時に、日頃は本学の管理・運営のお力添えを賜り、感謝申し上げます。本来ならば、佐川理事長が皆様方と直接お目もじの上、新年のご挨拶を申し上げるところではございますが、ご健康を害されまして、皆様方への新年の年頭所感を含めてのご挨拶がかなわなくなり、私が理事長職務代行、学長として年頭に際しての所感の一端を述べさせていただきます、新年のご挨拶に代えさせていただきます。

周知のように、去年すなわち2005年の世相を表す漢字として「愛」が選ばれました。しかし、2005年は果たして「愛」という漢字に相応しい年であったのでしょうか。私はむしろ、逆に2005年の世相を表す漢字としては「壊れる」すなわち「壊」の漢字が相応しかったような気がしてなりません。何故ならば、去年の春にはJRの脱線事故により尊い人命が数多く失われ、マンションが損壊され、今もなお悩み、苦しみながら後遺症と闘っておられる方が数多くみられるのが現状であります。また、アスベスト飛散による「じん肺」などの公害、丈夫であるべき鉄筋コンクリート造りのマンション耐震強度偽装の発覚、さらには幼い児童を狙った凶悪犯罪、ついには最も安心できる学習塾での殺傷事件。そして、私たちにとって最も衝撃的だったのが、皆様方に最も敬愛されている佐川理事長が病に倒られたことであり、まさに「壊」の酉年、2005年であったようです。

一方では、2005年は酉年であったからでしょうか、政界にあっては小泉政権の益々の安定化が図られたようです。周知のように、郵政民営化に端を発した衆議院解散、総選挙が行われ、賛否両論はあるかと思いますが、小泉総理による多くの女性マドンナ(私は女性コマンドが適切と思いますが)たちを各選挙区に刺客として送り、小泉劇場、小泉チルドレンなる言葉を生み、自民党が圧勝し、天下取り(「天下酉」)に成功を収めたことは、記憶に新しいことと思います。結果はどうであれ、「勝つためには手段を選ばず」の選挙戦であったような感を抱いたのは私だけだったのでしょうか。単に郵政民営化に反対したがために、永く続いてきた人間関係を破綻させ、義理も人情も無視した後味の悪い選挙戦であったように思います。しかし、本学においては心配ご無用です。永年にわたり、数多くの諸先輩、諸先生方が築いてこられた「大歯魂」と教職員ならびに同窓同士の強い絆で結ばれた人間関係は今も脈々と受け継がれ、今の政界のような状況にいたらない事を確信しているからです。

他方、昨年の上には診療報酬の下げ幅を3%の後半に調整するとの見解が出され、歯科にあっては4%強の下げ幅が予想されるなど、暗いニュースが多く、歯科界そのものの不況を象徴するかのような厚生労働省の決断であると思います。幸いにして、本学は常々、佐川理事長が言われておりますように、借金も無く運営されておりますが、ここ数年は楠葉・天満橋・牧野といった3学舎の運営や修理・増設、人件費の高騰などによる管理・運営費に比べ、160名の募集定員が128名に削減されたことによる授業料の減収、少子高齢化による受験者数の減少、歯科界の不況、ひいては診療報酬費の減額による病院収入の減収などが重なり、収支が逆転の傾向にあります。ただ、現時点では先輩の先生方による蓄財により借金は無いものの、このままの状態が継続すれば近い将来、本学も危機的状態に陥ることは明らかであります。

そこで、2005年度では教職員賞与の1ヶ月カット、今年1月からは理事会におきまして、理事、監事職の給与10%減が了承されました。今後も教職員や理事・監事の先生方にもご理解とご協力を得ながら、収支が安定した運営に努めていく所存でありますので、教職員の方々にもご理解とご協力のほど、よろしくお願いたします。ただし、現時点では本学は危機的状況に

は陥ってはおりません。したがって、教職員の皆様の給与をカットするとの考えは持ちあわせておりませんが、ただいま検討中であります。教職員の人事評価の方法が確立されたならば、それらの資料を基に給与の昇給、時には減給も考えなくてはならないものと言えます。

どうか、教職員の皆様方におかれましては、現在の社会情勢をご理解頂き、ご寛容の精神を賜りたく年頭に際し、お願いする次第であります。このような事態を述べさせて頂けるのも、本学教職員のすべての方々、2005年の世相を表す『愛』すなわち、大阪歯科大学『愛』に燃えておられると信じているがためでありませぬ。どうか、本学の将来を鑑みまして、深いご理解とより一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。理事長職務代行としての年頭の挨拶とさせていただきます。

なお、大学と同窓の関係であります。この件に関しましては佐川同窓会長が常々申されております「大学と同窓会とは一体感をもった強い絆で結ばれていなくてはならない」というご意思を尊重、継承し、理事長職務代行としましては、同窓会と大学とが“唇歯輔車”“相互補完”を基盤とした温かい人間関係で結ばれた、活気に満ちた大学一同窓会を目指して頑張る所存であります。どうか、同窓の先生方におかれましては、私の趣旨をお汲み取り頂きまして、ご協力とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

続きまして、学長としての年頭所感を述べさせていただきます。昨年の年頭所感として、NGOをもじった「義理・人情・恩義・恩情」を基盤とした教育、研究、臨床に勤しむことを申し上げました。今年度は、昨年の「義理・人情・恩義・恩情」に「忠」を加えたく考えております。何故かと申しますと、今年度は戌年（犬）であります。戌（犬）は、昔から「三日飼えば恩を忘れず」と言い伝えられていますように「忠恕」、すなわち真心をつくす、他人を思いやるなどを表す動物として、童話や小説などに広く引用されております。また、漢和辞典によると「忠」の一字は「真心、誠、まめやか」といった意味を表す漢字であります。このことから、今年度は他人様から授かった恩義・恩情を忘れることなく、義理を欠かさず、人情味のある忠の心、すなわち真心をもって大学教育、研究、臨床面での管理・監督に努めていきたいと考えております。

しかし、言葉では簡単ですが、行うは難しく、二人の副学長を中心に教授の先生方が教育・研究・臨床においてリーダー的立場に立って、全教員を指導して頂かなければ叶いません。幸いにして、本学の教授会は私を扇の要として、すべての教授諸公が協力的で私をサポートして頂いていることから、必ずや願いは全うできるものと確信いたしております。

まず教育面ですが、先ほどにも申し上げましたように「忠」の心、すなわち「真心、まめやか」をモットーに学生教育に当たるよう心掛ける所存であります。私が学長に就任した当時から申し上げておりますように、私立大学という特殊性を勘案した場合、入学という入口の門戸は広く開けますが、卒業という出口の門は狭くなることをご理解頂きたいと思っております。このことは決して留年させること、卒業を延期させ国家試験の合格率を高めるがためではありません。今年も残念ながら、5名の6年生が3月の卒業式を見送らなければならないような事態に至りました。加えて1月期の学士試験でも2～3名の学生が不合格になり、卒業資格消失者が増えるかもしれません。

しかし、私は留年させることを決して望んでおるのではなく、むしろ卒業と同時に国家試験にも合格して頂きたいというのが真意であるからです。同時に、留年するような学生の殆どが、本学の従来からの「どうにかなる」「どうにかしてもらえぬ」などといった安易感が勉学面にも現れ、「どうにかしよう」という意欲が感じられないからで、そのまま卒業させればたとえ国家試験に合格しても、厳しい歯科界を切り抜けていけないでありませぬ。したがって、留年させた学生たちには、教務部において別枠のカリキュラムを組んでもらい、真心と恩情をもって勉学面はもとより人間形成をも含めた教育を目指して、全教職員共々頑張る所存であります。

一方、研究面においては、各教授のご理解とご協力により、できるだけインパクトファクターの高い研究論文が出せるように頑張っております。

他方、臨床面に関しましては、診療報酬の引き下げ、不況な社会経済、経年的な人口減などを勘案した場合、今以上の収入は望めないでありませぬ。したがって、私立大学の附属病院であることから、収入が望めないならば支出の削減、すなわち節約と診療科の合理化などを図り、収支がうまく保てるように心掛け

ていかなくはなりません。診療科の合理化については、病院長や副病院長、各科長などともよく相談して慎重に進めていく所存であります。同時に、本年4月からは卒業研修が必修化され、その面でも財政的なかなりの負担、出費が病院サイドにかかってくるであろうことは、覚悟しなくてはなりません。

以上、2006年の年頭に際し、理事長職務代行、学長としての所感を述べさせて頂きましたが、これらのことを全うしていくためには教職員は勿論、同窓の先生方のご理解とご協力が得られなくては叶いません。私自身も微力ではありますが、体力と気力が続く限り頑張っていく所存でありますので、旧に倍するご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、今もまだ病床に臥せておられる佐川理事長、同窓会長が一日も早く現場復帰されることを、皆様方とともにご祈念申し上げたいと思います。同時に、本日ご出席賜りました教職員、同窓の先生方にとって、この2006年が健やかで希望に満ち溢れた1年であることを願って、年頭の挨拶とさせて頂きます。

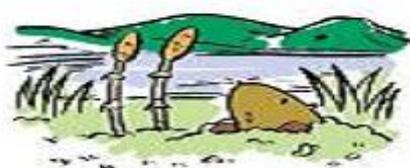


### 平成17年度 大学卒業式 大学院学位認証式



平成17年度大阪歯科大学卒業式ならびに大学院学位認証式が、平成18年3月17日(金)午前10時から本学講堂において開催された。

開会の辞、国歌斉唱のあと今井久夫学長より大学卒業生111名一人ひとりに卒業証書が手渡され、続いて大学院修了者18名に対し、指導された各教授より学位記が授与された。今井学長が告辞ならびに理事長職務代行として式辞を述べ、続いて記念品および感謝状の贈呈が行われ、最後に学歌を斉唱して平成17年度卒業式は無事終了した。



### 平成17年度 大学卒業式ならびに 大学院学位認証式告辞

学長 今井 久夫



日に日に春の気配が強く感じられるこの良き日に、ご卒業される111名の卒業生の皆さん、本日は誠におめでとうございます。この良き日を迎えられる皆さん方にとっては、心は日本晴れであろうとお察しいたします。同時に、この6年間、頑張っておられた努力と忍耐、熱意に対し、敬意を表したいと思います。

また、卒業生のご父兄におかれましても、この日を迎えられることを、一日千秋の思いで待ち望んでおられましたこととご拝察し、今までの苦労も、今日の日を迎えられましたことにより、全て忘却の彼方に消え去ったこととお察しいたします。その意味からも、本日ご臨席のご父兄方に対しましても『おめでとうございます』に加え、『お疲れ様、ご苦労様でした』というねぎらいの言葉も併せてお贈りしたいと思います。

さて、本日卒業される皆さん方は、先ほど申しましたように無事6年間の学業を終えられまして、2月の11、12の両日に行われました国家試験を受けられたのでありますが、学長としましては欲張りかもしれませんが、100%の合格を信じて止みません。その意味でも、国家試験の合格発表が待ち遠しく思います。

また、本日、卒業を迎えられました皆さん方の全てが、将来に向かっての大きな夢と希望を抱いておられることと思います。しかし、現在の歯科界は決して甘くはなく、むしろ厳しい現状が待ちうけているといっても過言ではありません。換言しますと、現在の歯科界は、皆さん方が過ごしておられた学生時代のような『どうにかなる』『どうにかしてもらえる』などといった、甘い考えは通用しません。むしろ、歯科界の荒波に立ち向かっていく強い精神力と健康管理、加えて専門知識の習得にも努めなくては、これからの歯科界は乗り切っていけないでしょう。したがって、これからは、各教授をはじめとする多くの教員から強制された『勉強』ではなく、自らが学ぶことに勉める『勉学』に勤しまなくてはなりません。この『勉学』の精神が無ければ、患者さんのニーズ、要望にも応えられないでしょうし、医事紛争、医療事故にもつながらず、といっても過言ではありません。

さて、話は少しそれますが、ご存知のように親には生みの親と育ての親があります。親心には変わりはないものの、その意味合いは少なからず異なるものと思います。すなわち、本日ご出席頂いている親御さんの殆どが『子供が幾つ何十になっても、頼りないが、素直で明るく、甘えん坊であってほしい』との願いを抱いておられるものと思います。反面、育ての親になれば、一日も早く、子供という殻を脱皮して、一人前の大人に成長してほしいとの願望が強くなるようです。いささか、極論かも知れませんが、本日のご父兄方が生みの親であり、私たち教職員は育ての親であろうと思います。

昔の諺に『子ゆえに悩む親心』といった言葉がありますが、わが子を信頼し、時には裏切られながらも、親バカぶりを努めてこられたことと思います。それも、生みの親であるが故になせる業だと思えます。反面、私たち育ての親は、親心には変わりはないものの、子供さんを一日も早く一人前の大人、換言しますと一人前の歯科医師に育てなくてはならず、そのためには時には厳しく、時には恩情をもった優しさでこの6年間の教育に携わってきたつもりであります。この生みの親であるご父兄と教職員である育ての親とのハーモナイズを旨く図られたことが、卒業という日を迎えるにいたったものといえます。

卒業生の方たちは、本日をもって、育ての親の下を巣立って行かれますが、これからの人生において万が一にも子供さんが苦難に陥り、落ち込んだり、悩んだりした場合には、生みの親としての立場から温かく見守り、優しく諭し、励ましてあげて頂きたいと思っております。

繰り返すようですが、今日、貴方がたが晴れて卒業式を迎えられたのは、決して貴方たちだけの力ではないということをご肝に銘じて頂き、同時に、この6年間多方面からサポートを頂いたご父兄、多くの教職員に対する恩義、恩情を決して忘れないようお願いいたします。おめでたい卒業式であるにもかかわらず、いささか説教じみたことを申し上げましたことをお許し下さい。これも、教育の場における親心の一端であることと、ご理解いただければ幸いです。

最後に、『人生は歩むのではなく、立ち向かっていく』という言葉をお贈りして、卒業生への告辞とさせていただきます。

さて、大学院修了者18名の皆さん、本日は誠にありがとうございます。また、ご出席のご父兄におかれましても、本日、お子様が指導教授から直接学位記を授与されている晴れ姿を目の当たりにされて、感慨もひとしおのこととお察し申し上げ、心よりお祝い申し上げます。

このたび、無事大学院を修了されました大学院生の皆さん方にとっては、研究中心の厳しい4年間であったことと思います。同時に、学部学生の時代と違って、博士(歯学)の称号を得るには、多くの方々からのアドバイスや指導はあったものの、自らの研究心と努力とが相まって得られた結果であることから、その感慨もひとしおであろうと思われまします。

しかし、忘れてはならないのが、この4年間で温かい目で見守って頂いたご父兄に対する感謝の念であります。貴方がたのように、大学院に進み、より多くの知識の研鑽に努めようと希望していたにもかかわらず、家庭的事情などにより、志半ばにして断念された方々も多くおられたことは事実であります。この意味からも、この4年間で研究に没頭できるような環境づくりに努力され、温かい眼差しで見守ってこられた本日ご出席のご父兄に対しましては、敬服の念を覚えざるにはおられません。

さて、皆さん方はこのたび、大学院を無事修了されたわけですが、中には直ちに専攻講座に入局され、研究を継続されながら後輩大学院生の指導や学生教育にも携わっていかれる方もあれば、地域社会の臨床に携われる方もあると思えます。いずれにしましても、皆さん方が手掛けられてこられた研究は、おそらくその緒についたばかりであろうと推察されます。したがって、今後は、専攻講座に在籍される方は勿論ではありますが、そうでない方も大学院講師(非常勤)として、後輩の指導に当たられますことを願って止みません。

今日、大学院を修了された賢明なる皆さん方は、現在の世相、とりわけ歯科界の現状あるいは将来にあつては、決して明るい面ばかりではなく、むしろ暗くて厳しい状況が待ち受けているであろうことは目にされ、耳にされていることと思います。このことから、これからは今まで以上に歯科界のみならず、社会情勢にも目を向けられまして、これからの厳しい歯科界を乗り切って頂きたいと念じております。

最後に、大学院修了者の方々には、人生訓の一つとして『朝は希望。昼は努力、夜は感謝』という言葉贈ります。先ほど申し上げましたように、これからの歯科界は、今以上にその厳しさを増すでありましょう。そのような時であるからこそ、朝には希望を抱き、昼には精一杯の努力を惜しまず、夜には今日一日が大過なく過ごせたことへの感謝の心を失わずに、これからの人生を歩んで行かれることを願って、学長の告辞とさせていただきます。

oo

**第54回大学卒業式、第42回大学院  
学位認証式式辞**  
理事長職務代行 今井 久夫

oo

111名の第54回大阪歯科大学卒業生ならびに18名の第42回大学院博士課程修了者の皆さん、本日は誠にありがとうございます。同時に、ご父兄におかれましても、ご子弟の晴れ姿を目の当たりにされて、大学6年間、大学院4年間の苦労も忘却の彼方へ去り、新たな夢と希望に胸を膨らませておられることとお察しいたします。

さて、学部学生の卒業生の皆さん、2月11、12の両日に行われました歯科医師国家試験の出来栄はいかがだったでしょうか。本日の皆さん方の顔を拝見しますと、自信に満ちた晴れ晴れとした表情が伺え、理事長代行といたしましては、安堵感を覚えると同時に、合格発表が待ち遠しく感じられます。周知のように、今年卒業される皆さん方には、卒後臨床研修が必修化されました。本学においても、単独型と複合型双方の受け入れ態勢は整っておりますが、本学で研修を受けられる方は勿論、他大学の附属病院、歯科病院あるいは開業医の診療所などとのマッチングが旨く行えた方々も、この1年間頑張っておりました。

一方、大学院博士課程を修了された皆さん方は、それぞれが専攻講座における指導教授の下での研鑽により、専門分野での知識をより深められたことと思います。しかし、単に学位を取得したことに満足せず、得られた知識と専門分野での研究成果をこれからの医療の分野に反映させて頂きたく切望して止みません。そのことが、世話になった大学、情熱溢れる研究指導を

して頂いた指導教授ならびに貴重なる提言をして頂いたインストラクターをはじめ、協力を惜しまなかった講座員へのご恩返しにも繋がるのです。

他方、学部学生の卒業生ならびに大学院修了者の皆さん方にとっては、周知のこととは思いますが、昨今の医学の進歩は著しいものがあります。とりわけ、再生医療の発展に伴う修復から再生への変遷、個々の遺伝子解析による疾患発症機序の解明、組織への侵襲を最小限に止めるミニマムインターベンションの概念など、著しい変革を遂げております。

これらのことを踏まえ、臨床の場にあっても半世紀前まではレディメイドであったのが、一昔前にはオーダーオーダーに、そして現在ではオーダーメイド医療の時代を迎えるように大きく様変わりをしてきました。このことは、医療そのものがドクター中心の医療から患者さん中心の医療すなわち“DOS”から“POS”の時代に移ったことを意味しております。このようなオーダーメイド医療による患者さんのニーズに応えるには、日々の研鑽が欠かせません。どうか、これからも日々の研鑽を怠ることなく、歯科医師のプロフェッショナルとして、国民に満足の得られる歯科医療を施され、同時に、将来はわが国のみならず、広く国際舞台にまで羽ばたいて頂くことを切望いたしております。

最後に、大学卒業生ならびに大学院修了者に『愛』という言葉をお贈りしたいと思います。周知のように、去年1年間の世相を表した漢字として取り上げられたものでありますが、この『愛』には多くの意味合いがあります。『博愛』『恋愛』『自然愛』など『愛』を含んだ言葉が数多くあります。

あの有名な詩人ゲーテが『空気と光と友人の愛、これだけ残っておれば落胆することはない』とっております。すなわち、人間が生きて行く上で欠かすことのできないのが空気であり、明るい光であります。しかし、この空気、光にも匹敵する人生での大切なものは友人の愛であると論じております。私も同感で、あなた方が学生時代、あるいは大学院時代を通じて築いてこられた『友愛・友情』を生涯絶やすことなく、継続されることを祈念して理事長代行の式辞とさせていただきます。



寄 贈

今年卒業されました大学第54回卒業生から、下記の寄贈を受けましたので報告します。寄贈いただいた各位には心より感謝いたします。なお、卒業生の意向として図書館の学習環境の改善に役立ててもらいたいとのことです。

・大阪歯科大学第54回卒業生(一同)

卒業を記念して 平成 18 年 3 月 17 日寄贈  
図書館本館へ研修室 3 室 1,000,000 円也

学位(博士)授与報告

- 渡邊 京子** 甲第551号 (平成18年3月17日)  
Differentiation by LSP and IFN- $\gamma$  of expression of adenosine receptors in macrophage cell lines RAW264 and J774 (RAW264および J774細胞における LSP および IFN- $\gamma$  によるアデノシン受容体発現の変動)
- 辻 則正** 甲第552号 (平成18年3月17日)  
骨様組織形成に用いた多孔質ハイドロキシアパタイト担体気孔表面へのヒアルロン酸応用の効果
- 吉川 美弘** 甲第553号 (平成18年3月17日)  
破骨細胞分化における P13-kinase の役割
- 宮地 秀彦** 甲第554号 (平成18年3月17日)  
コンポジットレジン補修修復に関する研究
- 増田 吉彦** 甲第555号 (平成18年3月17日)  
難治性根尖性歯周炎病巣から分離されたバイオフィルムを形成する通性嫌気性グラム陰性桿菌の性状
- 田口洋一郎** 甲第556号 (平成18年3月17日)  
Expression of  $\beta$ -defensin-2 in human gingival epithelial cells in response to challenge with *Porphyromonas gingivalis* *in vitro* (ヒト歯肉上皮細胞における *Porphyromonas gingivalis* 依存性  $\beta$ -defensin-2の発現)
- 諏訪沙耶佳** 甲第557号 (平成18年3月17日)  
コンポジットレジン表面におけるヒト歯肉由来繊維芽細胞およびヒト歯肉由来上皮細胞 Ca9-22の細胞増殖 (*in vitro*)

- 森 悠衣** 甲第558号 (平成18年3月17日)  
精神的ストレス負荷時の顎関節症患者における唾液中 Chromogranin A の変動
- 姜 由紀** 甲第559号 (平成18年3月17日)  
Effect of lafutidine on inflammatory pain (炎症性疼痛に対するラフチジンの効果)
- 村田 賢司** 甲第560号 (平成18年3月17日)  
上気道圧負荷に対するオトガイ舌筋活動と呼吸機能への影響
- 田村 佳則** 甲第561号 (平成18年3月17日)  
Dynamic MRI を応用した開閉口時の下顎頭と関節円板の矢状面運動計測
- 太田千佳子** 甲第562号 (平成18年3月17日)  
顎顔面形態と内側翼突筋との関係
- 岩脇 康人** 甲第563号 (平成18年3月17日)  
クローズドロック患者の治療による機能回復前後の外側翼突筋下頭の筋電図学的特徴
- 奥田 恵司** 甲第564号 (平成18年3月17日)  
Extracellular glutamate release in the edentulous rat hippocampus following tetanic stimulation: *in vivo* study by microdialysis (臼歯喪失ラットのテタヌス刺激による海馬グルタミン酸変動-マイクロダイアリシスによる検討-)
- 畑 慎太郎** 甲第565号 (平成18年3月17日)  
Influence of *Porphyromonas gingivalis* on the expression of cell adhesion molecules and apoptosis in human gingival epithelial cells (*Porphyromonas gingivalis* の影響によるヒト歯肉上皮細胞の細胞接着分子とアポトーシスの発現)
- 福地 和秀** 甲第566号 (平成18年3月17日)  
シスプラチンによるヒト口腔扁平上皮癌細胞株の Caspase-2活性化
- 鷹尾 智典** 甲第567号 (平成18年3月17日)  
繊維強化コンポジットを応用したブリッジの適合状態に影響を及ぼす要因の最適条件
- 荒垣 芳元** 甲第568号 (平成18年3月17日)  
顎整形力による顎顔面頭蓋の変形に関する力学的検討-オトガイ帽装置について-
- 松田 孝之** 乙第1470号 (平成18年3月22日)  
気孔内における骨形成に及ぼす担体形状の影響

敬 稗田豊治名誉学長に正五位伝達

平成18年1月16日、敬 稗田豊治名誉学長への正五位の伝達式が行われた。文部科学省を通じてお受けした位記は、今井理事長職務代行・学長から奥様の禮子様へ手渡された。



大阪歯科大学公開講座・枚方講座

第13回公開講座(枚方講座)が2月18日から3月11日までの毎週土曜日、本学楠葉学舎講堂にて開講された。天候に恵まれ、穏やかな陽射しのなか、延べ497名(初日145名、2日目108名、3日目122名、最終日122名)の聴講者が出席された。

最終日の3月11日には、4週連続全講座出席の74名を代表して、女性2人に修了証書と記念品(第12回公開講座の講演集)が今井学長から手渡された。



聴講者のアンケートで「講師の先生が分かりやすく説明してくれて良かった」「毎年楽しみに受講しています」「永く続けてほしい」など、本学の公開講座を支援する言葉をいただき、平成17年度の公開講座は無事終了した。

平成17年度 解剖体遺骨返還式

平成17年度解剖体遺骨返還式が、去る平成18年3月3日(金)午後1時から、楠葉学舎3階大会議室にて執り行われた。

始めに、歯科医学教育の為に自らの身体を提供された故人の御霊に対し、参列者一同ご冥福を祈り黙祷が捧げられた。続いて、今井学長よりご遺族に対し御礼が述べられた後、26体のご遺骨をご遺族お一人お一人丁寧に返還された。最後に、解剖学講座諏訪文彦教授から「献体にご協力を賜ったご遺族に対し、心よりお礼を申し上げたい」との謝辞が述べられ、式は滞りなく終了した。



教職員6名定年退職

平成18年3月末日で、6名の教職員が定年退職されました。定年を迎えられたのは、口腔治療学講座の戸田忠夫教授、歯周病学講座の今井久夫教授、化学教室の二川修治助教授、中央歯学研究所動物飼育員の高橋雍嘉さん、都築弘明さんならびに医事第一課事務職員寺崎温子さんの6名であります。定年に際し、一文を寄せていただきましたので掲載します。

定年退職を迎えて  
口腔治療学講座教授 戸田 忠夫



私は、昭和32年4月に大阪歯科大学(大学第11回)に入学し、卒業後、直ちに大学院(第3回)に進学して、昭和42年3月に大学院を修了いたしました。卒業の前年に講座制が確立し、幸い

にも昭和42年4月に大阪歯科大学助手に採用され、就職をいたしました。その後、39年間の永きにわたって大阪歯科大学のお世話になってまいりました。

教員として就職後は、大阪歯科大学の風土としての自由な雰囲気にあと押しされて、わが母校を少しでもよくしたいと志してきました。その為に、歯科専門誌の最高峰である“Journal of Dental Research”にも昭和42年(1967年)に投稿し、掲載されました。これが大阪歯科大学からの投稿・採択の第1号だと思っております。また、歯科関係の書物が少ない時代でしたので、米国の優れた書物を読んでいましたが、それらの中からSamuel Seltzer先生とI.B. Bender先生の共著「Dental Pulp」(「歯髓一臨床における生物学的考察一」, 医歯薬出版, 1971年)とSamuel Seltzer先生の「Endodontology」(「セルツアの歯内治療学」, 書林, 1979年)を翻訳出版いたしました。これらから得た知識と自らの臨床の実際を踏まえて「歯内療法—根管治療から充填まで—」(書林, 1976年)を著わしました。これらはすべて私の30歳代の仕事です。

また、臨床においてもなんとか米国のスタンダード

に近づきたいと思い、米国と同じ規準の歯内治療臨床を実施してきました。それらのこともあって、当時、わが国における歯科臨床水準、特に歯内治療の水準は西高東低とまで言われていました。

日本国民の歯科疾病構造の変化とともに、歯科医療の内容も大きく変化してきております。わが大阪歯科大学もこれらの変化に取り残されることのないように進化を続けて欲しいものです。わが大阪歯科大学は、これからの歯科界をリードするにたる人材と立派な環境・施設を有しております。人の絆が揺らぎ、心が乾く時代ですが、大阪歯科大学の皆様は、ぜひわが国の歯科界をリードするだけの「気概」を持ってください。日本の歯科界の現状は、ある一面危機的であると言わざるを得ません。こんなときには、ものごとを今までになく「透明」かつ「直接的」につかまなければならないことを肝に銘じていただきたいと思います。

永年にわたって、多くの皆様からお寄せ頂いたご厚情とご指導に支えられ、健康にて定年を迎えることができた幸せを衷心より喜び、感謝申し上げます。

最後になりましたが、皆様のご健勝とわが母校、大阪歯科大学の益々の発展をご祈念申し上げます。

「永遠なれ！ 我が大阪歯科大学」

わが人生に悔いは無し  
歯周病学講座教授 今井 久夫



振り返れば、わが人生の半世紀近くが大阪歯科大学にあったようです。昭和32年の4月に本学の学部学生として入学を許可され、昭和38年3月に無事卒業、国家試験にも合格したが、将来

については深く考えていなかったというのが正直な気持ちでした。逆に、将来のことを考える余裕もなく、迷っていたのかもしれない。

その時、「いまのままでは『歯科医者』ではなく、『破壊者(歯科医者)』になる」からといって、大学在籍を勧めてくださったのが、<sup>敬</sup>小西浩二教授でありました。当時、小西先生は保存学教室歯槽膿漏科の助教授として活躍しておられ、歯科治療においても優れた技量を

有しておられたことから、将来の開業も念頭に、即座に「よろしくお願ひします。私の身柄をお預けします」とお答えしたのですが、この『よろしくお願ひします』の一言が、以後の私の人生を大きく変えていったように思えてなりません。

私自身の頭の片隅には、前述のように10年程度大学にお世話になり、学位を取得した後は開業医として地域医療に励む考えでありました。しかし、『人生は選ばれても、自身では選べない』とうこともあり、私自身の考えていた開業という思いとは裏腹に、まったく違った方向に私の人生は向っていったようです。とりわけ、大学生活における定年退職までの10年間は私の人生を大きく変えたといっても過言ではありません。すなわち、学生時代を含めた大学生活48年という長い年月ではありましたが、定年まで残り10年となった平成7年に山岡 昭教授の後任として本学の歯周病学講座の教授に幸運にも就任させて頂くことになりました。しかし、教授就任僅か1年半後の平成9年に当時の学長・理事長であった佐川寛典先生から附属病院の副院長をおおせつかったのを始め、その3年半後の平成12年には病院長に指名され、さらにその3年半後の平成16年には学長に推挙され、6ヶ月間は病院長職と学長職を併任するなどこれまでにない重責を担うことになりました。

これまで何とか大過なくその任を全うすることができたのは、教職員の多大なるサポートがあったからだと思ひます。また、私自身も種々戸惑いを覚えながらも、任務をひとつひとつ処理していくことで、「やればできる」という以後の人生に対する自信にも繋がっています。このことが、佐川寛典理事長の突発的な不慮の事故による学長、理事長職務代行の兼任という大役も今日までつつがなく遂行できた要因のひとつにもなっているようです。

私自身、このような大学の多くの要職に就き、重責を担うとは考えておりませんでした。今思えば、これも天から授かった私の人生なのかもしれません。これからも、歯周病学講座の主任教授は退いても、残された2年6ヶ月の学長職を全うすべく、努力を惜しまず頑張つてゆきたく考えております。

最後に、定年までの間、私を支え、励ましてくださった多くの教職員、教職員、同窓、家族そして私を生みみ丈夫に育ててくれた両親に感謝し、『わが人生に悔

いは無し』の言葉でもって結びとさせていただきます。



### 定年退職を迎えて 化学教室助教授 二川 修治



例年にくらべて寒かった冬も遠のき、やわらかい日差しに包まれる春となりました。早いもので、奉職いらい非常勤の時期を加えると35年大過なく勤務を続け、退職の日となりました。

これは、ひとえに皆様のご指導、ご支援の賜物と心より感謝いたしております。

着任以来の思い出はつきませんが、当時、関連学科目間の教育内容のすり合わせが行われたことが懐かしく思い出されます。どうしてヒトの歯は次々と生え変わらないのでしょうか、(不要と思われた)親知らずの歯胚を保存、必要な時に移植ができないのでしょうか、歯胚を分割して移植することが可能であれば失った複数の歯の再生につながるのではないのでしょうか。また、実験動物による各種試験がヒトの命にかわって重要な位置にあることは承知しますが、動物愛護の立場からは反対の人たちも多いのです。実験動物による結果が良くても、ヒトに適用すると望ましくない副作用が出る事例もあります。そんなとき、ヒトによく似た免疫系を有する実験動物が作ればよりヒトに近い実験結果が得られるのではありませんか、などとこわいもの知らずの無礼な疑問をぶつけたものでした。

しかし、2006年3月の再生医療学会では生える前の親知らずから幹細胞を取り出し、骨、肝、神経細胞に成長させるのに成功、同月、ヒト造血幹細胞をマウスに移植、ヒト免疫化マウスを作るのに成功、特許を申請したとの報告や発表がなされました。タンパク質アミノ酸屋の私にとって、夢のような話が次々と実現するのを、遠からず近からずの現職場で見られたことを感謝しております。

講義では、演示実験によりタマネギからとりだしたDNAを学生諸君に味わってもらおうという、私の永年の夢を実現させたことが忘れられません。「DNAっておいしいんだ」ということを彼らは知ったわけです。



平成17年度 第2回人権講演会

人権啓発推進委員会では、今年度は「人権講演会」を2回に分けて行いました。第2回目は、平成18年2月27日に天満橋学舎西館5階臨床講義室において開催しました。

今回は「職場のセクシャルハラスメント防止のために」のテーマで、21世紀職業財団講師の桑野里美先生をお招きし、デリケートな問題を分かりやすく丁寧に講演していただきました。附属病院の教職員をはじめ多くの方が熱心に受講されました。

この問題は、国連の「女子差別撤廃条約」加盟を契機として「男女雇用機会均等法」が制定され、現在厚生労働省、文部科学省で積極的に取り組んでいるものの一つです。この問題を正しく理解し、職場から人権侵害を無くすよう一人ひとりの自覚を促しています。

人権啓発推進委員会では、働きやすい職場の創造をめざし、今後もそれに相応しいテーマで講演会を企画して参ります。



人 事

大学院任用

大学院教授 教授 山本 一世  
H18. 3. 1日付

特別昇任

化学教室 教授 二川 修治  
H18. 3. 31日付

教員採用

細菌学講座 助手 杉森千恵子  
H18. 1. 1日付

定年退職者

口腔治療学講座 教授 戸田 忠夫  
歯周病学講座 教授 今井 久夫  
化学教室 教授 二川 修治  
医事第一課 事務職員 寺崎 温子  
中央歯学研究所 動物飼育員 高橋 雍嘉  
中央歯学研究所 動物飼育員 都築 弘明  
H18. 3. 31日付

みなし定年退職者

歯周病学講座 講師 民上 良徳  
欠損歯列補綴咬合学講 講師 虫本 和彦  
歯科放射線学講座 講師 川崎 靖典  
歯科技工士専門学校 教員 三宅 宗次  
大学事務部 事務部長 上田 実  
施設課 課長 前田 勉  
附属病院 看護師長 楠 茂美  
医事第一課 事務職員 外山 晴美  
病院庶務課 事務職員 福田千枝子  
歯科衛生士専門学校 事務長 中矢 善彦  
歯科衛生士専門学校 主任 藤谷 三美  
H18. 3. 31日付

依願退職者

人事課 事務職員 伊藤 佳子  
附属病院 歯科衛生士 足立 麻樹  
H18. 1. 31日付

薬理学講座 助手 福田伊津子  
歯周病学講座 助手 信藤 孝博  
口腔外科学第二講座 助手 濱本 和彦  
小児歯科学講座 助手 本山 正治  
内科学講座 助手 原川 奈梨  
附属病院 看護師 久保 智子  
H18. 3. 31日付

任 用

第三学年助言教員 古川 智代  
H18. 1. 1日付

委 嘱

自己点検実施委員会委員 星野 茂  
H18. 1. 26日付

あしがき

—余談—

人間社会には一つの法則があるそうである。その法則とは、「自分でやったことが自分に返ってくる」というもので、起業家および人材育成のコンサルタントをしている福島正伸という人が提唱している。他人は鏡であり、「鏡の法則」ともいわれている。

その法則に従えば、(1)部下が言うことを聞かないのは、自分が部下の言うことを聞いていないからであり、(2)周りが助けてくれないのは、周りがやろうとすることを自分が助けてこなかったから、(3)職場が暗いのは、自分が暗いから、ということになる。この法則は何にでも敷衍できそうである。例えば、自分が信用されないのは、自分が他人を信用してこなかった結果であり、自分の評価が低いのも自分が他人の評価を高める努力・支援をしてこなかった結果である。悪いことばかりではない。他人にしたことが自分に返ってくるのであるから、他人を幸せにすると自分も幸せになるのであり、他人を成功させると自分も成功するということになる。反証しようと思えばいくらでも反証可能であるが、それにもまして人間社会、人間関係の一面をすどくとらえており、今まで気づかなかった視点からの指摘に、つい「なるほど」と思わせられる。古い言葉で言えば、「自業自得」ということになるかもしれないが。

福島さんは、他にもいろいろと為になることを提言している。その一つが「自立型姿勢」と「依存型姿勢」である。依存型姿勢とは、他者依存(他に期待する)、他者管理(与えられたことだけをやる)、他者責任(責任を他者に押し付ける)、他者評価(評価されることを目的とする)、自己利益(自分の利益を優先する)から構成されている。自分が今おかれている環境や他人に依存し、確実に楽にできることだけに取り組む姿勢である。自分が思いどおりのことができないのは、環境や他人のせいと考え、いつも不満に満ちている。

これに対し、自立型姿勢とは、自己依存(自分に期待する・自分が環境や他人に何ができるかを考える)、自己管理(自分の可能性に全力を尽くす)、自己責任(問題の責任を自分自身にあると考える)、自己評価(他者に評価されることを目的とせず、最大の努力をばら

う)、他者支援(他人は信頼し支援する対象であると考え)からなる。自立型姿勢は、自分が置かれている環境や条件には関係なく、また事の大小にも関係なく、自発的に全力を尽くすことによりすべての結果が決まると考える。また、どのような状況であれ、道を切り開く可能性を持っていると考える。その結果、物事が必ずしも思いどおりにならなくても、他者に責任を押し付けることも無く、不満がおきない。

例えば、何か新しいことに取り組まなければならない場合、依存型姿勢では結果を先に考え、うまくいく方法が見つからなければ、理由をつけて環境や他者に責任を転嫁しようとする。また、自らが責任を引き受けようとする姿勢が無いため、他者との信頼関係を築くこともできない。したがって、物事はすべて後ろ向きで処理されることになる。しかし、そもそも物事において確実に達成できる方法など存在しない。問題はここである。確実な方法など存在しないからこそ、また思いどおりにならないからこそ、全力で取り組もうと考えるか、それとも厄介な物事から目をそらし、うまくいかない理由探しに無駄な時間を浪費し、ついには環境や他者に責任を転嫁しようと考えてしまうかである。そのどちらの姿勢を選択するかが、その人の生き方の分岐点となり、その人を取り巻く人間関係を規定する。

現在どのような立場、人間関係にあるかはこれまでどのような姿勢で物事に取り組んできたかの結果である。同様に、将来はこれからどのような姿勢で物事に取り組むかで決まってくる。しからば、人間の集合体である組織においても、集団内の一人ひとりの物事に取り組む姿勢がその組織の将来を決めるといっても過言ではない。本学においても、一人でも多くの人々がたとえ小さなことでも、物事に対して自立型姿勢で取り組むことが望まれる。

大阪歯科大学広報 第141号  
発行日 平成18年3月31日  
編集発行 広報委員会  
〒573-1121 枚方市楠葉花園町8-1  
電話 072-864-3111